

浪曲研究をはじめた頃―森川司さんの思い出とともに―

真 鍋 昌 賢

現在、日文研では、浪曲（浪花節）のSPレコードが収蔵され、その整理が進められている。この浪曲レコードは、故・森川司氏（二〇一四年一月没）が所蔵していたコレクションである。正確に言うと、森川さんが所蔵していたコレクションを、二〇一一年一月にわたしが譲り受けて、その後、二〇一四年三月に、森川さんと相談の末、日文研に寄贈した。晩年体調を崩してからの森川さんは、自分のレコードがまとまったかたちで継承されることを望んでいた。わたしとしては、公的な機関に収蔵され活用されることが森川さんのコレクター人生の総仕上げになるだろうと考えていたので、生前に寄贈を完了できて、ほっとしている。

森川さんとの最初の出会いは、一九九五年であったと記憶している。博士前期課程の大学院生であったとき、修士論文のテーマとして浪曲をとりあげようと思ったわたしは、芝清之氏を木馬亭（東京）に訪ねていった。芝さんは、浪曲業界とファンをつなぐ『月刊浪曲』を発行していた浪曲研究家であり、『浪曲人物史』や『東西浪曲大名鑑』など、今となっては貴重な浪曲史の基本資料を残している。大阪から来た大学院生を珍しく思ってくれたのだろう。芝さんは丁寧にわたしの質問に答えてくれた。そして最後に「大阪にいるんだったら、この三人に連絡をとってみたらどうか」と言って紹介してくれたのが、芦川淳平氏、林喜代弘氏、そして森川さんだった。浪曲研究に必要な資料収集と基礎研究が、大学の外側で、着実にそして地

道に進められていた一方で、まだまだ研究対象としての浪曲の認知度は低い時代であった。当時においては、のちに訪ねていく唯二郎氏を含めて、浪曲研究の先達はみな、いわゆる在野の方であった。

何はさておき、森川さんに手紙を書いてみよう。そう思って、自分が大学院生で浪曲に関心をもっていること、戦時下の「愛国浪曲」をテーマにして論文を書きたいと思っていること、図書館で読める浪曲関連の書籍はおおよそ読んだが、なかなかSPレコードの音源にふれることができないこと、当時一番気に入っていた二代目廣澤菊春の声をずっと聴きたいということ、などいろいろと書き連ねたように思う。どのようにSPレコードを探せばいいのかも、駆け出しのわたしはよくわかっていなかったのである。ほどなくして森川さんから電話があり、「二度お会いしましょう」と言っていた。聴かせてほしいと頼んだSPレコードのいくつかを所有しておられるということだった。

それからというもの、定期的に森川さんと会って、ご自身と浪曲の関わりを聞かせていただくようになった。森川さんは、一九二三年（大正一二）に大阪で生まれた。祖母や父に連れられて浪曲席に通うようになり、次第に自分ものめりこみはじめたという。青年時代には、レコードを集め始めていたが、戦火ですべて焼失した。所有しているレコードはすべて、一九七〇年代に入って再び収集しはじめてからのものだった。森川さんの浪曲の好みは明確であり、低く太い胸声を至高としていた。しかし蒐集の方針は、好き嫌いを超越しており、網羅的だった。結果的に森川さんの集めた浪曲SPレコードは、関西・関東の垣根を超えたコレクションになっていった。

森川さんの浪曲との関わりに耳を傾けるうちに、次第に話題は、戦争体験に及んでいった。

戦地での生活、シベリアでの抑留生活の聞き書きは、森川さんの青春時代の回想に耳を傾けることでもあった。その頃、わたしは東京や大阪の素人道場を訪ねて、浪曲ファンの聞き書きを、少しずつ進めていた。浪曲ファンになるきっかけ、浪曲に魅かれる理由、それらは様々なのだが、交流を通じて私が聞き取っていたのは、浪曲の受けとめられ方とでもいうべきものだったように思う。浪曲がいかにしてひとりひとりの聴衆と出会い、人生に照合され、固有の意味を帯びていくのか。人生における意味は、曲師の三味線に支えられた演者の声がもたらす物語によって生みだされる。時として、聴くというよりも浴びるという表現が妥当とも思える声の力への関心は、ファンとの交流のなかで膨らんでいった。聞き書きの内容は、過去から現在まで多岐に渡ったが、そのなかには、戦時下での浪曲体験もあった。道場の常連のなかには、戦争体験者の方々が、まだ多くおられたのである。戦地であるいは銃後で、浪曲がどのようにそれを楽しむ人たちの生を支えていたのかという問いは、私よりもはるかに年配の方々とダイアログのなかで培われていった。森川さんの浪曲にまつわる思い出話にしても、それだけが想起されるというのではなく、人生の回想そのものと切り離せないものだった。国家の枠組みが極限にまで強調される状況において、兵士がどのように生きようとしたのか、生きざるをえなかったのか。当時のわたしにとっては、そうした人生の回想に寄り添い、そして質問するという営みが新鮮であった。人生の語りは、過去の事実そのものの再現というよりは、むしろ語られた時点において、語り手によって意味づけられた出来事である。しかしそれは、ひとりひとりの生き様のなかにあった大衆文化のあり方に、にじりよるための貴重な手段に他ならない。

修士論文執筆後も、森川さんとの交流は続いた。梅田の喫茶店でお会いすることが多かつ

た。森川さんはビリヤードが好きだったので、ビリヤード場で、球を突きながらお話をうかがうということもしばしばだった。そのうちにご自宅にうかがい、SPレコードを聴かせていただくようになったりもした。始発電車に乗って、東寺の骨董市に出かけ、蒐集の現場につきあわせていただいたこともあった。

そういえば、実際の口演を聴きに、森川さんと一緒に浪曲席に足を運んだことはほとんどなかったように思う。私がお会いしてからの森川さんは、もちろん、現役の浪曲師とのつきあいはいろいろとあったのだが、定席にせよ、ホールでの大会にせよ、興味はうすくなっていた。今から考えればもっと浪曲席に同行してもらい、その眼から浪曲の現在がどのように見えるのかを語ってもらえばよかったなと思う。森川さんは、自分のコレクションを通して、浪曲の醍醐味が実に多様であることを多くの人に知ってほしいという気持ちがあった。そして、業界に数十年かけて蓄積され、そして忘却されようとしている物語や節の膨大なストックが、再度掘り起こされるべきだと考えていた。客席で味わえる節のタイプが増えることは、ジャンルの間口を広げてビギナーを取り込むきっかけになるだろう。また、選択と比較の幅が広がるという点で、浪曲の奥行きを掘り下げてディープなファンをつくりあげることにもつながっていくのではないかと私も思う。

民間コレクターのコレクションは、偶然と必然がからみあう地道な蒐集行為のなかで集められたひとつひとつのモノの積み重ねでできあがっている。つまり、それは時代的背景や、社会的背景、そして個人的背景のもとに、紆余曲折を経て集積されたひとまとまりの個性的な業績だと言えるだろう。森川さんのコレクターとしての蒐集思想やファンとしての浪曲観について、今回の寄贈を機会にいま一度考えてみたいと思っている。

コレクターにスポットライトをあてることは、公的な機関が私的なコレクションをどのように資料として位置づけて保存・活用していくかという議論にもつながっていくだろう。歴史的音源への関心が高まる現在、森川コレクションがそうした議論をけん引するモデルケースとなることを願ってやまない。

（北九州市立大学教授／国際日本文化研究センター客員教授）